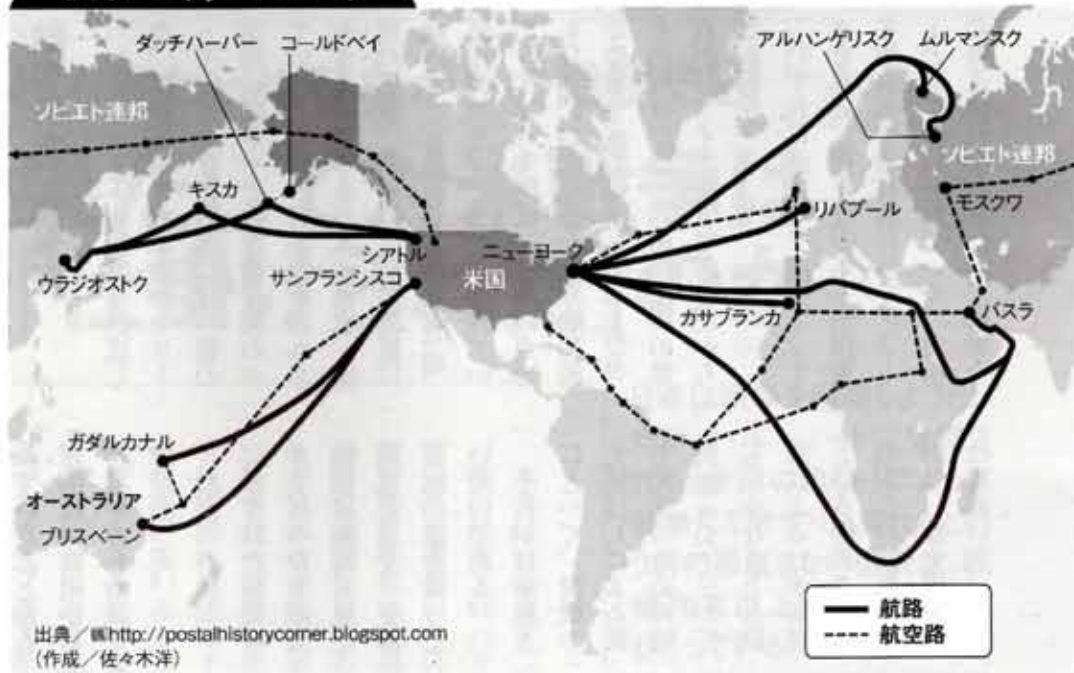


【図1】レンドリース・ルート



## 太平洋戦争と千島列島

北海道とカムチャツカ半島の間に1200キロメートルにわたって連なる千島列島に南北から進入した日本とロシアは、1855年に国境確

定を行なって択捉島と得撫島の間に国境線を引いた(日露通好条約)。この国境線は75年に引き直されて千島全島が日本領になる(樺太千島交

換条約)。辺境の千島に対する日本人の関心は薄く、漁業者が定住したのは南千島だけで、中千島はほぼ無人、北千島は北洋漁業の出稼ぎ島に

## 黒岩 幸子

多くの日本人の記憶から抜け落ちた

# ソ連軍の千島占領と米ソ極秘共同作戦

1945年のソ連軍南千島占領には米国の貸与艦船10隻を含む17隻が参加していた。そのうえ貸与艦船を引き渡す米軍基地で、ソ連将兵が訓練を受ける極秘の米ソ共同作戦「プロジェクト・フラ」も存在していた。この知られざる米ソ共同作戦が今年初め、北海道根室振興局により、明るみにされた。

佐々木洋

日本には1945年8月14日の天皇「聖断」で「終戦」となり、9月2日の東京湾ミズリ艦上の降伏文書調印で、大戦が一切終了と考える人々がいるようだ。

千島と根室の人々の見方は些か異なる。ペトロパブロフスクから来たソ連軍部隊が8月18日未明占守島を強襲、激戦を経て22、23日、日本軍が降伏。以後、千島の日本軍は抵抗せず、幌筈島から順次武装解除され、31日に得撫島まで北千島と中千島の占領が完了。ウラジオストクから来た別

の部隊が、南千島の択捉島に上陸したのが28日、国後島と色丹島は9月1日。歯舞諸島各島上陸の完了が5日だった。

その意味で、根室振興局が今年1月に道立北方四島交流センター・ニ・ホ・ロで開催した企画展「北方4島運命の9日間」は、歴史の風化を問い質す格好の試みだった。米ロの研究を突き合わせ、ソ連軍の南千島占領に、米国の貸与艦船10隻を含む17隻が参加したこと以外に、上陸戦の背後に、貸与艦船を引渡す基地が、搭乗するソ連将兵の訓練を施す、米ソ極秘の共同作戦である「プロジェクト・フラ」(Project Hula)が存在した事実を提示したからだ。

本稿では、ソ連の千島占領を世界史の動きに即し眺めてみたい。

### 米は若者の犠牲回避で

独ソ戦開始後、米国は41年10月、ソ連と米ソ武器貸与協定を結び、



出典 / 「高倉新一郎『千島列島史』南方同郷援護会、1960年」

敵の攻撃だけでなく、千島の過酷な自然環境も日本軍を苦しめた。簡略な兵要地誌だけを頼りに上陸した部隊は、濃霧、怒濤、吹雪、厳寒に悩まされながら人力のみで道路、兵舎、洞窟陣地の構築に携わった。千

島について無知な大本営は、無謀な戦力増強や改編を繰り返しては損耗を大きくした。44年夏にサイパンが陥落すると、米軍は南から日本本土を爆撃できるようになり、千島防衛の意味は失われた。本土決戦のために千島から部隊の抽出が続く中で、日本の敗戦が決まった。千島での日本軍の苦闘をよそに、ソ連の対日参戦はすでに43年に米ソ間で合意され、その見返りとしての千島(クリル)列島の引き渡しも決まっていた(45年2月ヤルタ協定)。千島を取引材料に使ったのは敵国だけではない。戦争末期にソ連に和平の仲介を頼もうと画策した日本の最高首脳部は、北・中千島を捨て石にしてソ連に譲渡するつもりだった。日本によるポツダム宣言受諾後に千島北端の占守島に侵攻したソ連軍とそれを迎え撃った日本軍の間の激戦を経て、千島全島がソ連軍に占領され、約5万の日本人将兵がシベリアに抑留された。南千島の島民や戦時北千島で操業を強いられた漁業者はソ連の支配下に取り残され、数年後に全員が島を追われた。そして、戦時の海没犠牲者たちは、人々の記憶から抜け落ちたまま今も千島の冷たい海の底で永い眠りについている。

くろいわ ゆきこ・岩手県立大学教授

なった。

水産資源の供給地でしかなかった千島列島が、戦略的意義を高めるのは1930年代だ。36年の帝国国防方針は仮想敵の第1、2番目に米国とソ連を挙げた。アリユーシャン列島とカムチャツカに近接する千島は、米ソ両国に対峙する日本の軍事的要衝になった。陸海軍が大急ぎで千島に飛行場や要塞を設置した頃、ヨーロッパではすでに世界大戦の火蓋が切られていた。

41年4月に日ソ中立条約を結んだ直後に独ソ戦が始まると、日本は日独によるソ連挟撃を検討するが、結局は対米戦争へと舵を切った。同年11月末に択捉島軍寇湾から出撃した連合艦隊は、真珠湾を奇襲して戦

### 北・中千島を捨て石に

果をあげた。こうして千島は、ソ連と不穏な対立を続けながら対米戦争に専念する日本軍の拠点となった。特に、アリユーシャン西部を米国に奪還されてからは、対米第一線としての千島全島防衛が進められ、陸海軍合わせて約10万人が投入された。

しかし、43年以降の日本軍の劣勢は挽回不能だった。アリユーシャンから出撃する米軍機が北・中千島を爆撃し、オホーツク海を跋扈する高性能の米国潜水艦は、千島海域の日本船舶を片端から撃沈させた。絶対国防圏の筆頭に挙げられ、「神州不可侵第一線の責任」を負わされた千島だが、海軍は南方戦線に去り、残った陸軍には戦闘機、戦車はもちろん、最低限の装備も輸送船舶も不足していた。

島について無知な大本営は、無謀な戦力増強や改編を繰り返しては損耗を大きくした。44年夏にサイパンが陥落すると、米軍は南から日本本土を爆撃できるようになり、千島防衛の意味は失われた。本土決戦のために千島から部隊の抽出が続く中で、日本の敗戦が決まった。

千島での日本軍の苦闘をよそに、ソ連の対日参戦はすでに43年に米ソ間で合意され、その見返りとしての千島(クリル)列島の引き渡しも決まっていた(45年2月ヤルタ協定)。千島を取引材料に使ったのは敵国だけではない。戦争末期にソ連に和平の仲介を頼もうと画策した日本の最高首脳部は、北・中千島を捨て石にしてソ連に譲渡するつもりだった。

以後、北極海／中央アジア／太平洋經由(26頁図)で、航空機やトラック、ジープ、戦車、機関車、大砲、食糧などを供与した。東西挟撃を恐れたスターリンに対し、南進後対米戦に苦闘する日本は、二正面対決を避けるべく、ドイツの敵ソ連との中立条約を維持。「対ソ静謐」に努め、太平洋經由のソ連向けレントリース(Lend-Lease)船団を黙認するに至る。43年8月、大本営は、ソ連向け船団への干渉を厳禁。以降、日本軍守備隊は石油・食糧・弾薬を満載する長蛇の船団を見守る。

ヒトラー政権の胎動期に、欧米軍民にはまだ先の大戦の凄惨さが焼き付いていた。これがミュンヘンの対独宥和を規定した諸国民の気分だった。ドイツ国防軍が第2次大戦の火蓋を切り、独ソ戦が勃発しても、米国は依然、中立主義を崩さず、英・ソ支援の武器供与はしても、参戦はしなかった。

米国の厭戦気分が跡形もなく消え去り、第2次大戦が真の世界戦争に拡大した転機が日本の真珠湾攻撃だった。今次大戦全体の犠牲は前大戦の比でないが、仏・英は逆である(28頁表)。英米軍が北アフリカ戦線を優先した結果、欧州で専ら独軍を食い止め、反撃にでたのがソ連赤軍であり、犠牲もその分夥しい。

米軍は機動力と物量で圧倒し、西太平洋の日本軍を駆逐。44年6月7日にはサイパン／テニアンを陥落させB29の本土空襲が始まったが、硫黄島や沖縄本島では多大な犠牲を伴い、日本上陸となれば、米地上軍死傷が数十万に及ぶとの推測もあった。米国の若者の犠牲を極力避ける切り札がソ連軍の対日参戦である。満州には無傷の関東軍100万がいた。

スターリンが対日参戦の条件としてロースベルトに吞ませたのが、樺太南部の返還と千島の「引き渡し」、満州の二鉄道及び遼東半島の諸権益だった。

## ソ連は見返り確保のため

ヤルタ密約に先立つ44年10月にスターリンは赤軍の極東集結と物資補給に関する要求リスト作成を指示、ハリマン駐ソ大使に米ソの共同作戦にも言及した。同月に、対日参戦分の食糧・装備備蓄の米ソ極秘共同「マイルポスト作戦」(Milepost Operation)が策定され、同年末には早くも同作戦の積荷がソ連極東諸港に到着し始めた。引渡し基地は米国のダッチハーバー(Dutch Harbor)(26頁図)。

同年末にマイルポスト作戦とは別枠でソ連太平洋艦隊に、米国艦船の引渡し基地で、ソ連将兵に訓練を施すプロジェクト・フラの原

型が出来上がる。ただしクズネツォフソ連海軍人民委員とキング米海軍作戦部長がダッチハーバーの安全性に懸念を表明。より安全な半島端部のコールドベイ(Cold Bay)を選ぶ。45年2月のヤルタ会谈の期間中のことだ。両提督とも首脳会谈の随員だった。実際日本軍は42年アッツ島攻略の際、ダッチハーバーを空襲したことがある。

米軍は同年5〜9月に掃海艇55隻、上陸用舟艇30隻、警備艦28隻など計145隻をソ連に供与。4〜8月に米軍要員1500人が同基地に張り付き、ソ連から通訳団が40人余も常駐、搭乗艦の種類ごと、ソ連将兵1万2000に、順次訓練を施した。このことを元米軍士官の歴史家R・ラッセルが「Project H III」で明かしている。

トルーマンは、日本降伏後の8月15日に「日本軍がソ連軍に降伏すべき地域」に千島列島を含めるのを「失念」した。8月18日には「降伏すべき地域」に北海道北半分を含めるのを峻拒した。それゆえスターリンは、ヤルタ

【表】

### 第1次大戦と第2次大戦の主要交戦国の最大動員時兵力と犠牲者の比較(万人)

第1次大戦			第2次大戦				
	総兵力	戦死兵	傷病兵		総兵力	戦死兵	傷病兵
米	436	13	23	米	1,236	41	67
英	890	111	209	英	509	35.4	28
仏	841	138	427	仏	700	16.6	39
帝政ロシア	1,200	170(360)	495	ソ連	1,250	1,360	500
伊	562	65	95	中国	500	132	176
日	80	0.49	0.09	日	826	230	30
独	1,100	205	425	独	1,000	553	600
澳・洪	780	120	362	伊	450	38.9	12

注/①総兵力は最大動員時。②戦死兵のパーセンは作成者。③第1次大戦の日本戦死兵は靖国神社記者数。資料：R.Goralski(1981),S.Everett(1980)など。帝政ロシアはF.G.Krivoshchev(2001)。(作成/佐々木洋)

## 海上自衛隊に貸与

密約で約束された見返りを確保するには、いかなる犠牲を払おうと、参戦せねばならず、まして参戦前に終戦を迎える訳にはいかない。

トルーマンの本心とは別に、ラッセルは本作戦を、「大戦中の武器貸与計画で、米ソ両軍水兵が相互に協力し合った最も野心的な事

業」と評価する(ラッセル前掲書)。クズネツォフも回想記で語る。米国は「計50隻以上のフリゲート艦、掃海艇、……上陸用舟艇を送ると約束。海上の戦闘行動を控え、これら艦船は誠に好都合だった」。45年春夏に受領した艦船は「敵が占領する港湾と島々に上陸作戦部隊を運用するのに適していた」と(勝利への道)。

プロジェクト・フラをめぐるラッセルとクズネツォフの指摘には齟齬がない。根室振興局の突き合わせはこの点でも成功している。企画展は主に、ラッセル前掲書、B・スラウインスキー著「千島占領一九四五年夏」、I・サマリンの紀要論文「上陸作戦艦船1945年8月のサハリンとクリル諸島の上陸作戦に参加した軍艦と補給船舶の注釈付きリスト」を参照した。

米軍は、戦後ソ連が返却し横須賀港に係留していたフリゲート艦27隻を、朝鮮戦争の勃発に伴ない急速同海域に出勤させた。このうち18隻が草創期の海上自衛隊に、す型PF護衛艦として貸与される。根室の企画展はくす同型護衛艦「なら」のパネルも提示した。

ささき よう・札幌学院大学名誉教授  
「ジョレス・メドウエージェフ、ロイ・メドウエージェフ連集」(全3巻、4分冊、現代思潮新社)に解題・監修として関わった。